

令和5年度 学校評価

■ そう思う ■ どちらかといえば、そう思う ■ どちらかといえば、そう思わない ■ そう思わない ■ わからない

①いのちを大切にする心の教育の充実といじめや不登校への細やかな対応

| 1 一人一人の児童生徒の尊重 | 2 道徳・心の教育の充実 |
|--|--|
| 学校は、一人一人の子どもを大切にしたい指導や対応ができていますか。 | 学校は、豊かな人間性を育む心の充実に努めていると思いますか。（礼儀、生命尊重、思いやりなど） |
| | |
| 考察：「一人一人の児童生徒の尊重」については、教職員と保護者・児童との認識の違いが見られる。教職員は、一人一人を大切にしている気持ちが大きいですが、それが保護者や児童に伝わっていない。特に児童の「どちらかといえばそう思わない」が1割を超えているので、定期的な個別面談等、一人一人と関わる時間をとる必要がある。また、「道徳・心の教育の充実」については、見えにくいものなので、さらに親子道徳の取組みなどを推進し、学びの実際を見てもらえるようにする。 | |

②確かな学力の向上と社会の変化に対応した教育の推進

| 3 授業力向上 | 4 タブレット端末活用 |
|--|--------------------------------|
| 先生方は、わかる授業、楽しい授業づくりに努めていると思いますか。 | 子どもは、タブレット端末を活用して学習していると思いますか。 |
| | |
| 考察：「授業力向上」については、保護者や教職員に比べて、わかる授業・楽しい授業だと思う児童が少ない。一人一人の児童の実態をていねいに見取り、児童が「楽しい」と思える授業づくりに力を入れ実践を重ねていく。「タブレット活用」については、高い割合で肯定的な意見を得られた。がしかし、教職員の割合に比べて、保護者・児童の割合はやや低いので、その差を埋めていく必要がある。また、学力向上につながる効果的な活用方法を検討すること、過剰な動画視聴やネット閲覧などの弊害について児童に理解を促すことも必要だと考える。 | |

③教員が子どもと向き合うための体制の整備

| 5 学校の支援体制 | 6 共生社会を担う人材の育成 |
|---|---|
| 学校は、支援を必要とする子どもの教育について、共通理解を図りながら取り組んでいると思いますか。 | 学校が行っている「交流及び共同学習」等は、相互理解の促進につながっていると思いますか。 |
| | |
| 考察：「学校の支援体制」については、保護者の「思わない」「どちらかといえば思わない」「わからない」が30%程度あることをしっかり受け止め、今後も共通理解を図りながら取り組むことを続けたい。学校が取り組んでいることを保護者に知っていただいたり、学校への相談窓口（困りを相談できる場所や機会）を増やす必要がある。「共生社会を担う人材の育成」については、今年度、特別支援学級担任から児童に話をして考える授業を設けたので、児童は保護者よりも「そう思う」が多くあったものと思われる。その感想を保護者へも発信してきたので、来年度も継続したい。 | |

| ④ 学習に集中できる教育環境づくりと安全対策の推進 | |
|---|---|
| 7 安全と事故防止 | 8 家庭や地域との連携協力 |
| 学校は、子どもの事故防止などの安全教育に取り組んでいると思いますか。 | 学校は、家庭や地域と連携・協力しながら教育活動を進めていると思いますか。 |
| <p>保護者 生徒 教職員</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> | <p>保護者 教職員</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> |
| <p>考察：毎月の安全点検をもとに修理等をしているが、大人と児童とは目線が違うので、児童に「危ない場所はないか」のアンケートをとっても良いかとも考える。また、そのことが、ひいては「自分の身は自分で守る」という安全教育に繋がり、安全に対する意識向上が図れるのではないだろうか。</p> <p>「家庭や地域との連携協力」については、学校だよりや学年・学級通信で学校の取組みや児童の様子を発信してきた。コロナ禍も収まり、授業参観・学級懇談会・PTA行事等も通常に戻ったことも、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の割合の高まりに繋がったと感じる。しかし、依然として保護者の20%以上が「そう思うわない」「どちらかといえばそう思わない」「分からない」であることを真摯に受け止めなくてはならない。</p> | |

| ⑤ 本校の教育 | |
|--|--|
| 9 しっかり考えチャレンジする子ども | 10 自分の考えをはっきり伝え、共に学び合う子ども |
| 子どもは、いろいろなことを自分で決めて挑戦したり、進んであいさつをしたりしていると思いますか。 | 子どもは、自分の考えを持ち、それをはっきり伝えることができていると思いますか。 |
| <p>保護者 生徒 教職員</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> | <p>保護者 生徒 教職員</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> |
| <p>考察：場の設定や学級の取組みにより、児童は自ら挑戦し進んであいさつもするようになってきた。しかし、教職員と児童・保護者のずれが大きいのには、「それぞれの基準に差がある」または「時と場・相手で児童の様子が違う」ことが一因ではないかと推測する。教職員側の投げかけや、児童の自主的活動の活発化を図っていく必要がある。また、「自分の考えをはっきり伝え～」はなかなか難しいが、習慣化を図るには地道な活動でも続けていくしかない。心を開き、伝えたい意欲を育み、伝え方を支援していきたい。自分の気持ちをはっきり伝えることと、あいさつを進んですることは、とても通じるものがある。まずは、大きな声であいさつをすることから始めると、自分の気持ちを伝えることにも繋がるのではないだろうか。このことは、学校全体で取り組むべき課題である。挑戦できている部分があるとは思いますが、100%に近づくように今後も指導をしていきたい。</p> | |

| ⑤ 本校の教育 | |
|---|--|
| 11 素直で、自分も友達も環境も大切にしている子ども | |
| 子どもは、自分も友達も大切にできていると思いますか。 | |
| <p>保護者 生徒 教職員</p> <p>0% 20% 40% 60% 80% 100%</p> | |
| <p>考察：運動場で遊んでいる児童の声を聞くと、「仲間に入れて」と言っているのがよく聞かれる。子ども社会の中でも、きちんと自分の意思を伝えて遊べていると感じる。また、きずなアンケートや日々の児童の言葉を見ると、児童は素直で、自分も友だち大切にしようとしている。しかし、評価においては、保護者・児童と教職員の間には大きな開きがある。これは家庭できていることが、学校ではそれほどではないのかもしれない。この項目は、児童が安心して学校生活を送るためにとても大事な視点なので、「子どもは経験の中で学び伸びる」ということを保護者と教職員が共通認識し、学びを逃さず支援していくことを忘れてはならない。三者全てが肯定的な意見になるよう改善を重ねていく。</p> | |

来年度の具体的な取組について

- 月々の「きずなアンケート」をもとにしたきめ細やかな対応と、電話連絡や懇談会、面談などを通して家庭との連携に努める。また、機を捉えて児童との個人面談を設けたり必要に応じて外部機関（SC、SSW）に繋いだりする。
- 日常の道徳教育の充実に努めるとともに、本年度取り組んだ「親子道徳の日」についての保護者や児童の感想を積極的に発信していく。
- 校内研修を通して、一人一人の実態に応じた個別最適化の授業づくりを進めてきた。来年度も更に「個に応じた指導」の充実に図り、わかる授業・楽しい授業づくりに努めていく。
- 授業でのタブレット活用が当たり前になってきたので、今後は、「主体性・協働性を向上させるための使い方」「自分の学習に最適なアプリの選択」「委員会活動等、授業以外での活用」「プログラミング教育」など幅を広げ、力をつけるための活用を身に付けさせていく。また、それと同時に、過剰な動画視聴やネット閲覧などの弊害、SNSの危険性等、情報モラル教育も計画的に行っていく。
- 教員が児童の困り感に寄り添ったり、保護者からの相談窓口の周知を図ったりして、それぞれのニーズに応じた支援を行っていく。
- 校内委員会の役割を明確にし、月に一度の校内支援委員会でより良い支援を検討・共有することにより、担任のみに拠らない支援を図る。
- 今年度、木の実学級担任による児童への話が大変有意義でありその後保護者全体への発信も啓発に繋がったので、来年度も継続して行う。
- 月一回の安全点検を行う際、教員のみ視点で行っていたが、委員会等を活用して児童の視点も入れる。
- 各避難訓練を確実に実施及び危機感をもって行い、有事の際に身を守ることができる安全教育を徹底する。とともに、系統的・学年横断的な安全教育を実施する。
- 授業中・学習中に、自分の考えを持ち発言できるようにするために、教師が意図してその場を設けたり、学級内で何でも言い合える支持的風土を構築したりする。また、そのために児童が主体となる授業改善を図っていく。
- 学校行事や委員会活動において、自分の考えを表明する機会を持ち、やらされる活動ではなく児童自身が活動の主体となれるようにしていく。とともに、児童の自己有用感の醸成も図る。
- 企画・生活委員会を中心としたあいさつ運動を、地域や家庭に広げる。家庭での取組みの状況を学校にも知らせてもらったり、学校の「あいさつ目標月間」の取組みを強化したりすることにより、地域全体での意識向上に繋げる。

学校関係者評価

- 子どもの主体性を伸ばす取り組みがなされていると感じた。学校保健委員会を参観して、子どもが自主的に取り組んでいる姿も見られた。また、校則検討委員会では、子どもの方がしっかり考えてまともな意見を述べていて感心した。
- 参観では、子どもがタブレット端末を活用して学習する様子も見られた。もう既に使い慣れていると感じる。将来的には、パソコン技能等は必ず必要となるものであるので、小学校のうちから適切な使い方が学べるのはとても良い。
- 地域の様子や親同士のつながりをもても、今と昔では実態がまるで違っている。PTAも任意になっているし子供会も無い町内があることから、学校と地域とが一緒になって、親同士の繋がりを作るための新しい方策を考えていく必要がある。
- 学習において、「分からない」と言っている子どもが数%いるが、内容のレベルが上がってきている（昔は上学年で学習していた内容が下学年で学習するようになっていく）のも一因だと思う。
- 子どもたちの挨拶は気になるところである。不審者等の問題はありますが、横断歩道に立っていたり緑のベストを着て挨拶を先にしても親から返しが無い場合もある。親が挨拶をしなければ子どもはしないので、家の中でも外でも親が率先してするようにしてほしい。
- 教育現場に効率化は馴染まない面もあるが、仕事量や学習内容が増えている現在、なるべく効率化を図りつつより良い教育を目指して欲しい。